

信頼論 研究ノート

中恵 真理子

0. はじめに

エスノメソドロジの創始者であるハロルド・ガーフィンケルが1963年に「安定した共同行為の条件としての『信頼』の概念およびそれにかかわる実験」、通称トラスト論文で相互行為を可能にする条件として「信頼」を扱っていることを知り興味を持った。浜 日出夫氏(1996)が言及しているように相互行為を可能にする条件というものがルールそのものではなくルールの間主観的な妥当性についての期待が共有されていることについての主観的な期待であるのなら、それには何の保障も存在しない。パーソンズ流の社会秩序が共通価値という堅い基礎の上にある秩序観とは全く対照的な秩序観が開けてくる点が面白かった。

もう一つは「信頼」という極めて心理学的な用語が社会学の中で扱われているということに対して興味を持った。

このような観点から研究を進めていくうちに「トラスト論文」の学史上の位置を問題にするようになった。

1. 現象学的社会学

シュッツによって創始。さらにシュッツの影響を受けたバーガーやルックマンらによって発展された現代社会学の一つの流派。社会を人々の固有の日常的体験から構成される意味世界として捉える。

浜 日出夫氏は、シュッツの「現象学的社会学」の学史的由来を、実証主義とE.フッサールの超越論主義の双方に対する否定に求めている。氏によれば、「現象学的社会学」の固有の対象領域である〈日常生活の世界〉は、この二重の否定によって姿を現したとされる。

1) 実証主義に対する批判

実証主義的行為理論は科学的に検証可能な知識にもとづく合理的な手段選択を唯一の行為規範とする。パーソンズは『社会的行為の構造』において、実証主義的行為理論が、行為の主観的要素をくみつくしていないとして「価値規範」というもう一つの主観的要素を導入する。これによって成立したのが、彼の主意主義的行為理論である。

これに対してシュッツは実証主義の不十分さは、その観点がそもそも全く主観的でないという点にあるとする。この批判の根拠はシュッツと実証主義双方の「事実」の定義の違いに由来する。

実証主義の「事実」の定義は、新カント派の現象と概念の二元論を採用しているために科学者が概念の網の目をかぶせることによって構成した構成物である。現象それ自体はカ

オスであり、科学者が自らに属する権限によって事実を構成するのである。この場合科学的言明の妥当性を根拠付けるのは「方法論」である。つまり、科学者の行う科学的操作の正確さの問題によって処理されるのである。

シュッツはこの定義を「危険」なものともみなす。なぜなら、この定義はシュッツにとって自然的事実と社会的事実の構成様式の違いを無視しているからである。自然的事実の場合は自然科学者によって構成された「一次的構成物」である。が、「社会的事実」の場合は、行為者にとり意味を持っており社会科学者が構成する前にすでに行為者の常識的解釈によって社会的事実として構成されているのである。つまり、社会科学者の科学的操作によって構成したとしても、それは二次的なものにすぎないのである。

シュッツはこの点に実証主義の誤謬があるとする。実証主義の行為論は科学者によって構成されたモデルにすぎないのに、それを生きた人間と混同される危険があるからである。

こうしてシュッツは前科学的生を営む行為者の常識的解釈と科学的言明を明確に区別する。そして人々の常識的解釈が繰り広げられている〈日常生活の世界〉を対象とする。この意味で現象学的社会学は、社会についてのより根源的な経験の回復を目指しているといえる。

2) フッサール超越論的社会学

1) でシュッツの「現象学的社会学」が、実証主義の行為理論に対する批判のうえに成立し、生きた人間の主観的観点への還帰を主張したものであることを述べた。しかしながらこうした主張は「独我論」に陥ってしまうという可能性を否定できない。2) ではフッサールの超越論的社会学との対決を通して、シュッツの「現象学的社会学」の輪郭を鮮明にしよう。

フッサールの超越論的現象学の一番の特徴は、人間が、自然的態度によって世界を自明なものとして受け入れているこの信念をエポケーすることにある。この手続きを「現象学的還元」を経て絶対的に疑えない超越論的主観性の領域へと降り立つ。こうして得られた超越論的主観性はもはや世界の存在を自明なこととみなして世界内で素朴に生きている世界内的存在ではなく、むしろ世界を自己の意識作用の対象として構成する主体である。

超越論的主観の困難は、間主観的な世界をいかにして、その孤独な性格のうちに構成するのかという問題である。世界内の諸主観が超越論的主観によって構成されるとするなら、それでは独我論に陥ってしまう。世界をともに構成する超越論的主観の共同体が、〈私〉という超越論的主観のうちで構成されなければならない。そして、まさにこの他我構成の問題を巡って、シュッツはフッサールと袂を分かつたのである。なぜなら、結論からいうならフッサールは、この他我構成の問題を解決できなかったからである。

シュッツは独我論へと通じる超越論的主観性ではなく、世界のうちで他者の存在を自明なこととして素朴に受け入れている人間の態度、すなわち「他我の一般定立」を分析の対象とする。言い換えれば、世界内の存在である我々は「疑う」ということをエポケーすることによって、相互行為を可能なものとしている。そしてこの「自由のうちでの相互行為」の場こそシュッツのいう〈日常生活の世界〉なのである。

〔参考文献〕

浜 日出夫 1982 「ピグマリオンとメドゥーサ」『社会学評論』33-1

Parsons Talcott 1937 "The Structure of Social Action" 1982 稻上 毅 厚東 洋輔
(訳) 『社会的行為の構造』 木鐸社
塩原 勉 編 1993 『新社会学辞典』有斐閣 394

2. E.フッサール

エドモンド・フッサールは、1959年 4月 8日プロスニッツ(ドイツ メーレン州)に生まれた。アビトゥア後、彼は物理学、天文学、そして哲学を学ぶために、ライプツィヒ大学に進んだ。ここでの彼の哲学の教師はヴィルヘルム・ヴントであった。1978年彼は、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学に進み、パウルゼンの講義を聴いた。1886年、学位取得後、ヴァイヤーシュトラウスの助手として一学期間ベルリンに戻ったが、その後再びウィーンに戻り、特に、フランツ・ブレンターノのもとでさらに哲学を学んだ。1886年秋、フッサールはアレに赴き、一年後、心理学者シュトゥンプフのもとで、教授資格論文「数の概念について—心理学的分析—」によって教授資格を修得した。その後1901年、ゲッチンゲン大学の助教授になり、1916年に、H.リッケルトの後任としてフライブルク大学に赴き、1938年 4月27日に亡くなるまで、フライブルクにとどまった。

1900年に著した「論理学研究」では、心理現象を客観的世界内部の一事実とみる当時の心理学の根本的欠陥に気付き、意識体験への新たな接近法としての現象学を提唱した。その後1913年に出版された『純粹現象学と現象学的哲学のためのイデー』では、超越論的に定位した措置方法を展開する。ギテンズ(1976)によると、フッサールの関心の焦点は、志向性が「イデー化の行為」を必要としており、「イデー化の行為」は注意する対象そのものとは全く別個のものであるという点にあるという。なぜなら、描象的概念はいずれの特定の対象物や出来事とも同定されえないし、一定数の対象物や出来事の集約でもないからである。それゆえ、フッサールは、もし、我々がエポケーの状態であらゆる経験的個別事項を「括弧に入れる」なら、我々はあたかも意識の本質を看破することができるようになるという。

以上のように、初期のフッサールは、超越論的現象学を追及するうえで、「生活世界」と「自然的態度」—日々の生活で、物質論的現象学や他の人びとに関して行う通常の想定は、主観性をその純粹な形で明らかにするために一掃すべき、たいして価値のないものであった。晩年の研究では、「生活世界」を強調し、歴史的現実性により一層近付けたかにみえるが、超越論的哲学のレベルにとどまっていたと言えよう。

〔参考文献〕

- Anthony Giddens 1976 "New rules of sociological method" 1987 松尾精文
(訳) 『社会学の新しいの方法基準』 而立書房
Hilmar Blauner 1978 "Die phänomenologie Edmund Husserls und ihre Bedeutung für soziologische Theorien" 1988 川島秀一他(訳) 『フッサールと現象学的社会学』 晃洋書房
塩原 勉 編 1993 『新社会学辞典』 有斐閣 1263

3. A. シュッツ

シュッツは、1899年ウィーンでユダヤ人として生まれる。第一次世界大戦後、1919年にウィーン大学に入学し、大学では、国際法や経済学を学ぶ。卒業後はオーストリア銀行協会に職を得、後のアメリカ亡命後の1956年にニューヨークにあるニュースクール フォー ソーシャル リサーチで常勤の教授職に就くまで、銀行の仕事と学究の二重生活を送った。シュッツの生涯の大きな特徴は、この実業人と研究者との二重生活、もう一つはユダヤ人であったことから亡命生活を余儀なくされたことであろう。

代表的論文である「よそ者論」や「帰還者論」は、異なる文化の中に住む人や、帰ってきて同化しえない故郷を発見する人をテーマとしたものであるが、そこにはシュッツ自身の生活史と日常的体験がにじみ出ている。

生存中のシュッツは、アメリカ社会学の世界で必ずしも大きく評価されたわけではなかった。パーソンズとの往復書簡を見ても、シュッツの望んだ直接の面談も実現しなかったし、パーソンズの冷淡な対応さえ読み取れる。また、シュッツの論文がアメリカの重要な社会学の雑誌に掲載されることも少なかった。

シュッツの名は、彼に直接学んだ、P.L.バーガーとルックマンの共著『現実の社会的構成』（1966年、邦訳名『日常世界の構成』）によって社会学の中で受け入れられるようになった。ガーフィンケルはドクター論文（1952年）でシュッツを引用しているように、彼に影響を受け、後にエスノメソドロロジーという新たな社会学理論を構築していった。シンボリック相互行為論の領域でも、T.シブタニが影響を受けている。

〔参考文献〕

片桐雅隆著 1993『シュッツの社会学』いなほ書房

mit Parsons, T. hrsg. von Sprondel, W.H. 1977 "Zur Theorie sozialen Handelns: ein Briefwechsel" 1980 佐藤 嘉一（訳）『社会理論の構成・A・シュッツ = T・パーソンズ往復書簡』 木鐸社

塩原 勉 編 1993『新社会学辞典』 有斐閣 716

4. H. ガーフィンケル

1917年に生まれ、ネットワーク大学、ノースカロライナ大学、ハーバード大学でそれぞれ学んでいる。ハーバード大学で、T.パーソンズに師事し、博士号を取得したことは有名。彼の博士論文『他者の知覚』（The Perception of the Other）は、「社会秩序はいかにして可能か」という、いわゆるホッブズ問題をパーソンズの機能主義を批判しながら、シュッツの現象学の立場から考察している。

浜 日出夫氏（1995）によると、ガーフィンケルの批判は、ホッブズ問題というパーソンズの問題の定式化そのものに向けられており、三点に要約できるという。第一に、ホッブズ問題は、行為者が科学的合理性を基準にして、目的を追及すると前提しているから起こるのであり、パーソンズがその前提を無批判に受け入れている点、科学的合理性は科学者の理論的態度を支配するものであり、行為者は、むしろ、それとは区別される常識的合理

性の規範に従って行為していると確定されなければならない。第二に、万人の万人に対する闘争は、二人の「行為者が同一のもの」を欲求するから起こるのであるが、そもそも、複数の行為者にとって、ある対象に関して、なぜ知覚が同じであるかを問題にしていない。複数の行為者にとって対象が「同じ」であることは、すでに秩序が存在していることを意味する。第三に、パーソンズが対象の間主観的合一性を自明視していたのは、パーソンズが、「対応説」という立場を取っていたからである。対応説では知覚された対象と現実の対象の二つを区別する。それゆえ、科学的方法を用いれば、対象を正確に捉えることが可能であると考えられる。パーソンズは対応説を取ることによって行為者もまた科学的合理性に従って行為する「行為者と観察者の共同体」を想定していたのである。これに対してガーフィンケルは、シュッツに由来すると主張する「同一説」をとる。同一説とは、知覚された対象と現実の対象は同じものであるとする立場である。しかしながら同一説を採用すると、秩序問題は困難なアポリアに陥る。対象が知覚の産物であるなら、本当は何であるかを決定するような特権的な観察者も存在せず、論理的には「世界の複数性」という帰結を生じるからであると言はる。もはや、対象の間主観的同一性はいかにして可能かという問いは、解決不可能であるかのように思われる。ガーフィンケルは、博士論文では、このアポリアに取り組むことはしなかった。そして、後に紹介する1963年の「トラスト論文」で再び取り組んだのである。

1940年から1941年にかけて、ガーフィンケルは、博士論文の草稿をシュッツに送り評価を求め、彼と接触をとり始めた。ガーフィンケルは、パーソンズ、シュッツ双方の理論の比較検討を通じて、独自の理論を展開していく。

1954年、オハイオ州立大学を去り、シカゴ大学で約半年間、陪審員の調査プロジェクトに加わるが、この時期にエスノメソドロジーという用語を思い付いたことが知られている。この年の秋の新学期年から、彼はカリフォルニア大学ロス・アンジェルス校に赴任し、現在に至っている。彼は、近年、自らの門下にあるM.リンチ、E.リヴィングストンらと、数学や自然科学の領域での作業（work）についてのエスノメソドロジー的な分析を行っている。エスノメソドロジーの広がりについては、1960年代の終わりから、カリフォルニア以外でも、主にニューヨークやボストンなどの東海岸へと影響が広がっていった。海外への広がりとしてはイギリスとドイツの大学に広まり、そうして1973年になって、フランスでも初めてエスノメソドロジーが紹介された。

〔参考文献〕

- Hetitage, J 1984 『Garhinkel and Ethnomethodology』 Polity press
塩原 勉 編 1993 『新社会学辞典』有斐閣 213

5 ガーフィンケルのトラスト論文

1963年に書かれた「安定した共同行為の条件としての『信頼』の概念およびそれにかかわる実験」、通称トラスト論文では、相互行為を支えているのはルールではなくルールの間主観的妥当性に対する信頼によって支えられているということを明らかにしたと浜 日

出夫氏(1995)(1996)はいう。ここでも氏のトラスト論文に対する理解を軸に、秩序を研究することと「信頼」の重要性についてまとめておきたい。またそれが社会学においてパーソンズ流の堅い秩序観に対して別の秩序観を提示したのである。

4で、ガーフィンケルが博士論文で行ったパーソンズに対する批判をみてきた。対応説をとるならば、同じルールが共有されていることが相互行為の可能性の条件となりうるが、同一説に立てば、より根源的な問題としてルールの同一性がいかにして可能であるかをさらに問わなければならない。そしてガーフィンケルはこのルールの間主観的妥当背を作り出しているものを「信頼」と呼んでいる。つまり相互行為の可能性を支えているのはルールそのものではなくそのルールを作り出している信頼なのだということである。

ガーフィンケルはトラスト論文のなかでガーフィンケル自身の行った「三目並べ実験」という興味深い実験について述べ、このことを明らかにしている。

三目並べ実験とは、3×3の升目にふたりのプレーヤーが交互にマークを置いて、先に三目並べた方が勝つというゲームである。実験では、実験者は何くわぬ顔をして相手のマークを動かして自分のマークを置く。当然被験者の混乱が予想される。ところが被験者の中には実験者が三目並べとは異なる(もともと相手のマークを動かして自分のマークを置いても良かったんだと解釈して)ゲームを始めたのみなし、自らも新しいゲームを始めた一群の者がいたのである。

この実験から明らかになったことは特定のルールに従うことと、特定のルールに従うことを互いに信頼し合っているということが、独立した事柄になっているということである。浜氏(1996)は次のように述べる。

同一説に立ちつつ、相互行為の可能性の条件を追及したガーフィンケルはルールの共有という仮定が相互行為を支えているという結論に到達したといえる。だが、相互行為の可能性を支えているのがルールそのものではなくルールの間主観的妥当性に対する信頼であるということは、相互行為には実は基礎というものが無いことを意味している。〈中略〉パーソンズの考える社会秩序が共通価値という堅固な基礎の上で立ち立てられているのに対してガーフィンケルの社会秩序はいわば底が抜けているといえる。

〔参考文献〕

H. Garfinkel, "A Conception of, and Experiments with, 'Trust' as a Condition of Stable Concerted Actions," in O. J. Harvey, ed., *Motivation and Social Interaction*, Ronald Press, 1963

浜 日出夫 1995 「エスノメソドロジーと羅生門問題」『社会学ジャーナル』第20号: 103-112

浜 日出夫 1995 「ガーフィンケル信頼論再考」『年報筑波社会学』第7号: 55-74

1996 「もう一つの秩序問題—ジンメルからガーフィンケルへ—

『社会学史研究』第18号: 27-37

エスノメソロジーとその周辺

—平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集—

1998年3月3日発行

編集・発行 徳島大学総合科学部 榎田 美雄

〒770-8502

徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

☎ (0886) - 56 - 9308 (榎田研究室)